
日常（偽）

本須和 雄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常（偽）

【コード】

N8395Q

【作者名】

本須和 雄二

【あらすじ】

一般的な生活が好きな少年（？）が非日常的な生活を送るその気になればすぐに終わりそうだけど終わらせる気のない物語

1 (前書き)

前にこの小説を見た事あるような……って方きつといます。1
1名くらい

何にも弄ってません。ただp主が投稿する奴を間違えたただけなん
です。

本当にもうしわけありませんでした。

特に変化の無い日常。いきなり変わる訳でもなく、どこかにいるLV10や幻想殺し、ゾンビってわけでも無い。俺はただの一般人で今過ごしている状況はマジで日常だ。

別になんかスゲー事起こって欲しいなんて思っていない。たまにいるよな？「何か起こんねーかなースゲー事」って言う奴。友達10人位の中に1人はいるだろう、多分。だが俺は最初にも言ったが起こって欲しいなんて思っていない。思いたくも無い。そんなくならない事を考えてた時、誰かの声が聞こえてきた。

「おい、聞こえてるか？ロリコン野郎」

「ロリコン野郎って言われると反応したくなくなるな」

このアホ毛アンテナがビンビンに立っていてオレンジ色と茶色をたして2で割ったような奴はさっき言った「なんかおこんねーかな」とか言ってるのでマジで言っている幼馴染に近い仲間である。

「で？用件は？」

「おっと、そうだった。次、数学だろ？ノート、写させてくれ！」
ふむ、今の俺には二つの選択肢がある一つは渡す、もう一つは「断る！」とキッパリと言う。せつかくの機会だ後者を選ぼう。

「断る！」

自分でも迫力があつたと自分で自分を褒める。おだてても何もで

ねーよ。チクシヨー

「そのセリフは・・・対策済みだ！」

「な、何だと!？」

クソツ！諦めると思ったんだがな・・・さあって一体どんな対策なんだが・・・。

「その対策とは・・・？」

「一回だけ何でも言う事を聞くから！」

・・・警戒した俺がA HOだったのか？

「そうだな・・・金は後で払うから昼飯の時メロンパン買ってきてくれるか？」

「了解！ってことでノートを・・・」

「そういえばノート貸すんだっけな・・・何のノート貸すんだっけ？理科のノートでも渡しておくか」

「これか？」

「・・・これは何かのポケですか？数学のノートだよ！理科じゃないか！」

「おつとすまない、完全に忘れてたぜ」

「急いで数学のノートを渡す残り時間少ないが大丈夫なのか？」

「ホレ、チャイムな（キーン）」

「あ（コーン）」

「言ってるそばからこれかよ！ま、まあいい。俺には予備の紙はある・・・十分戦えるはず・・・！」

「じゃー！」

「そんなことあって授業が始まった何故かさっきの10分は長く感じたぜ・・・！」

「その後は特に目立った事は無く約束どおりメロンパンを買ってきてもらい普通の学校生活を過ごした。」

1 (後書き)

この小説を読んでいたたぎありがとうございます。

これからもゆっくりと更新していきますので

よろしくお願いします

感想とか出来たらください

ですが単に「つままない」などの感想はやめてください

仮につままないならどの辺がつまらなかったのか

そしてそのつまらなかった部分がどうやったら楽しくなるのか

そういう所を教えてください

光栄です

では

放課後になった。

「……………」

急いで帰る奴もいれば部活で帰りが遅くなる奴もいる。そして俺は帰りが遅くなる奴だ。別に部活に入ってるわけではない。俺は帰宅部だからな、理由なんて無い。ただの気分さ、気分。

そんなくだらない事を思いながら部活を真面目にしている生徒達を見る。知らない間に時間と我を忘れていた。

「…………ハッ！」

やべえ…………寝てたわ。こいつわ…………帰るのがめんどくさいな。とりあえず時間を見てみる

PM7:37

…………腹減ったな、何も考えずに帰るのが一番安定してるかもな。
「…………お？」

帰り道にコンビニを見つけただ無視して帰りたいが俺の腹は限界だし(空腹的な意味で)…………おや？勝手に体がコンビニに向かって歩き出したよ？助けて。

コンビニに入ると共に定番の音が流れた。何であるのかわからんがとりあえず「イラッシャイマセー？」的な意味だといいな。うん。とりあえず俺は飯を買う前に気になる本誌があるか探してみる…………無いなあ。てか俺の欲しいのがコンビニに売ってるわけ無いか。チクシヨ…………ん？ああ手伝いはいい、自分で探すのが一種のロマンなんだ。理解してくれ。

「……………」

いやさ、別に人の読む本とか趣味を叩くわけではないんだが…………明らかに男性が読みそうな本を真剣に読んでいる女性がいる。目の前に。いや、写真集は読むと言うよりも見ると言う言い方がいいのか？ま、気にしなくてもいいか。

「……。」

俺が見すぎたのか女性はその本を元の場所に置き俺を警戒してるかのようにじつと見つめてきた。……この沈黙は耐え切れん……！逃げようか話そうか考えてる時に女性の口が動いた。

「変態？」

「!？」

俺の頭の中は一気に吹っ切れた。最初に出てきた言葉が疑問系で「変態」……駄目だ、とりあえず質問にはちゃんと返そう。

「お、俺の顔……そんなに変態ツポイデスカ？」

「あ、いや、そういう意味じゃなくてね？その……あだ名って言えばいいのかな？……。」

「……ハッ！」

俺のメモリーが凄い勢いで読み込んでやがるぜ……。思い出した、全部思い出した。理由は忘れたが何かしらの原因で「変態」って呼ばれるようになったんだっけ？いやあ……。懐かしいなあ……。

「全部思い出したぜ……。久しぶりだな」

「やつと思い出してくれたか！つてことでこの本と弁当買って！」

「……!？……いや、別にいいけど……。」

別に金が無くて困ってるんじゃないぜ？困ってるのは買って欲しい物だ。なんでその本を堂々と買ってと言えるんだ？俺の記憶が正しければ未成年だよな？考えたら負けって奴ですか？分かりません。とりあえず頼まれた本と弁当とさけるチーズを持ってレジへ。

「すみません……。これ、買います」

「……。」

無言で作業にはいる店員。俺絶対「変態」って思われてるんだろ。うな……。ハハッ悲しすぎて涙も出ないぜ。そんなくだらない事を思いながら何歳か年下の幼馴染（さっきの女性）に本と弁当を渡し、別れを告げて家に帰った。

どうでもいいが俺は一人暮らしだ。結構前に親に追い出されたん

だ。理由も無しに、まったく、どんな判断だ。って別に嫌ではないが嫌か？って聞かれたら「はい」って答えそうな事を考えないでさっさと家帰って寝るか。なんか疲れたよ。今日は

2 (後書き)

この小説を読んでいたいただきありがとうございます。
ええ、テンプレの一種です気にしないでください。
これでノート1枚(裏と表)分が終わりました。
ぶっちゃげ本音言うとなら2枚分しか残っていません。
どうしましょう。授業の時間を犠牲にしてチマチマと書いています。
では

夜。一言でまとめると暗い。

「・・・」

昔の怖い話を思い出した。あれはまだ子供だったら怖いとか今は怖くないのかな言い方してみるが実際怖い。俺、超能力いらなない・・・そんなくだらない事を思い出したせいで夜の道に恐れながら家に戻る。

「・・・あれ？」

リビングの部屋・・・なんか明るいな。俺今日テレビ付けながら出かけたのか？・・・駄目だ、思いだせん。ストープなら消した記憶はあるんだがな・・・考えてもしょうがない、入ろう。

ガタツ

「・・・」

あ、鍵で開けるの忘れてた。鍵閉まってるのに普通に空くわけが無いだろ。普通。

「・・・ただ・・・いま・・・？」

まるで友達の家勝手に入るような気分だ。そんなことはどうでもいい。警戒しながらテレビに近づいてみる。人だ、人がいる性別は女性・・・かな？

「・・・なんだ、客か・・・」

おい待てよ。俺はさつき鍵を開けた。ってことは鍵は閉まってたはず・・・なんで入れた？合鍵？勝手に作らねーよ。だったらあれ誰？何でちよつと薄いの？何で俺の気に入りの深夜枠のアニメ見るの？・・・そういえばどーでもいいが最近録画予約した記憶の無い奴が買つてに録画されてた時があつたな・・・考えても無駄だな、ために聞こう。ヘタレにならぬために

「・・・」

ばれぬようにこっそり動く俺。まるで俺が泥棒みたいだ。相手の

背に着いた所で肩を触れようとした
スッ

「!？」

避けられた!? いや、違う!? 俺は確かに肩を触れようとした!
なのに当たらなかつた! これはつまりどうゆうことか? . . . シラ
ネ。さつぱり分からん。とりあえず聞いてみるか

「なあ、あんた . . . ちよつといいか？」

「 . . . ? 」

言葉は通じたのだろうか、不安しかないな。呼んだのはいいが言
いたい事が思いつかない . . . ええい! やけくそだ!

「どうやって入ってきた？」

「 . . . 」

壁に向かって指を指した . . . すり抜け? 頭が痛くなってきた . .
. . . 今分かつてる事は「すり抜け可能」「喋れない」「よく見ると
やや薄い」だ。YESかNOが分かればいけるかと思つたが . . .
さすがに無理があつた。とりあえず今必要なのはメモ帳とペンだな
. . .

「そ、そうか。ちよつと待っててくれ」

「 . . . 」

分かつてくれたのか? まあいい、さつさとコンビニに行つてメモ
とペンを買おう。そして気になる事を聞こう。実際そんなにないが
「イラッシャイマセー」

やる気の無い声だな。「もつとはきはきと見え! 」と言いたいが
どーでもいい。さつさとメモとペンを . . . あつたあつた後はレジ
に . . .

「袋はお入れになります . . . すか？」

「あ、いらぬです」

「分かりましたあ」

何だこのやる気の無いような言い方は . . . もう考えるのはやめ
よう。終わる気がしないからな。

「じゃ・・・300円です」

今しゃんびやくえんって言おうとしたよな？こいつやる気がない以外にも理由がありそうだな・・・。ま、どーでもいいか。

「・・・」

100円玉が3枚も入っていない俺の財布は一体なんなんだろうか。
・俺は500円を出した。

「200円のおとりです。おりやとうございやしたあ」

突っ込んだじゃ駄目だ突っ込んだじゃ・・・駄目だ！

何も言わずに急いで家に帰る。理由は分からないがなんとなく、なんとなく急がなきゃいけないような気がした。

ガタツ！！

家に帰るとテレビの電源は消えてた。何処に言ったかと思いつながら周りを探しまくった。・・・ん？何かベッドが膨らんでる？恐る恐る見てみた。・・・居たよ。しかも寝てやがる！俺の寝場所です寝てやがる！・・・どうしたらいいんだ？とりあえず選択肢は二つある。

1.どかす 2.別の場所で寝る 仮にもうひとつあるならば

3.隣で寝る・・・ネーヨ。2だな、2で行こう。近くにメモとペンを置いてつと・・・ソファで寝るか。疲れたし。

ぐるるるる

・・・これが腹減った時の音なのか？考えたら負けか。にしても腹減ったな。何も食ってないからか。

「そつだ、時間は・・・」

辺り真っ暗。電気つけるの忘れてた・・・。「テカツ」今思ったが寝てるときに電気付けるとたまに起きるよな？ベッドを見てみる。大丈夫だな。

テレビをつけてニュースを見る。ついでに時間確認。 PM10:00
・・・ん？んん？どんだけ時間が経ってるんだ？今日はさすがに疲れてるらしいな。チーズ食った後さつさと寝るか。

「・・・チーズだけじゃ食いたりねえ・・・！」

火山活動が復活したとかしなかったとか知らないがこっちは腹減
ってんだよ！ってテレビに突っ込んでも意味無いか
「寝よう・・・」

今日の寝所は外ほどではなかったが寝にくかった。

3 (後書き)

この小説を読んでいたいただきありがとうございます。

学校生活が終わりました(3月18日に

未だに卒業した気分がしません。

何故でしょう?自分でも分かりません。

とりあえず学校生活が終わるという事は

これの元を書く時間がなくなっただって事です。

やばいです。個人的にやばいです。

とりあえず「日常(偽)」の原稿(?)は終わりました。

後は書いてupするだけです。

これだけは言っておきます。

「日常(偽)」が終わったからって「日常」は残るからな?

つまりどうゆうことか?

想像におまかせします。

ではまた次回会いましょ

では

トトトトトトトトトトトト

「……………」

そろそろ目覚ましの音変えようかな……。目覚めが悪すぎる。とりあえず起きて周りを見る。何かいる……。テレビ見てる……。

「あれ？あんた……。誰？」

昨日の事を殆ど忘れた俺は何も無いかのように聞いた。昨日なんかあつたっけ？

「……………」

返事が無い。だがメモには文字が

「飯」

「飯ね……。了解」

最低限でもあの人の名前が「朝飯」ではないことを祈ろう。てか保証しよう。そんな名前をつけられた日には俺はきつと家を出るぜ。

「飯は何かいい？出来る範囲なら作れるが……」

「パンの中に野菜と何か」

「分かった」

何か……。？まあいい、朝だもんな。朝からカツとかを頼む人は

・あまり見かけないからな。どーでもいいが俺は朝はパンでは無く米派だ。

「耳ついてるが大丈夫か？」

「問題無い」

「そうか」

さつきからずっとテレビ見てるな。ま、言葉のドッジボールはして無さそうだからいいか。そんな事を考えながら飯を机の上に置く。

「飯置いとくぜ。後先に食っててくれ、ちよいと用事があるからな」

「トイレか？」

「いえ、朝風呂ッス」

「そっか」

よく喋るメモだ。さっさと朝風呂済まして飯でも食うか。

「・・・」

私の飯は準備されてるが彼の飯は準備されていない・・・朝風呂が長いつて事か？まあいい・・・自己紹介はした方がいいのだろうか？予備にしておこう。「幽霊」です。だからちよつと薄いです。彼は気づいて無さそうです。自分が「幽霊」だって事・・・自己紹介はこれくらいで・・・いいよな？勝手に進ませてもらう。詳しい事がわかって無さそうだから自分の知ってる範囲で説明しよう。つて言つても言う事殆ど無いんだけど。私は二ヶ月前に死んだ。原因は酔っ払った状態で運転した奴にひかれたらしい。飲酒運転って奴だな。別に怨もうなんて思わなかった。怨んでも意味無いと思つたから。とりあえず霊になつて行けない所に行つたりもしたけど・・・特に何も無かつたかな。ある日今居候を勝手にさせてもらつているマンションを見つけた。普通だったけど何故か興味があつた。そして勝手に部屋の中を見させてもらった。煙草臭い部屋。香水臭い部屋。イカでも干してあるのかと思うくらい謎の臭いがする部屋・・・臭いしか記憶に残つてないんだ。ちなみにこの部屋は新品の匂いがした。部屋も綺麗で置いてあるものが新品に近かつた。いつもどんな暮らししてるのか気になつて観察してみた。とりあえず分かつた事は月曜日から金曜日は六時から七時辺りに家に戻り、多少掃除して寝る。土曜と日曜は主に外に出てなんかしてるらしい。家ではいろんな事をしていた。趣味でも探しているのだろうか？観察に満足して出ようとしたら出られなくなつていた。一週間以上同じ所にいたからだろうか・・・だがここで過ごすのもいいと思い、今ここに住んでいる訳だ。ちなみに大体二ヶ月前くらいからいたりする。そろそろ朝風呂が終わりそうだな。さっさと食べるか。

「朝は冷たくないとな・・・」

元は目覚めさせるために行った行動なんだが最近はずやらなきやいけなくなつたんだよな。めんどくさい体だ。腹減つたしさつさと飯でも作るか・・・

「・・・ん？」

飯に変化が無い・・・。メモには「ごち」と書いてあるのに・・・聞か、話が進まん。

「飯・・・食つたのか？」

「食つた。中々美味かつたぞ」

「けど何も変わってないんだが・・・？」

「君は霊とかは信じるか？」

「見た事はないg・・・ハッ！」

今の言葉で何かが閃いた。実際いるとは何と無く思った事が何かあるけど一度も見た事が無かつたしな。生は初めてだ。生は。

「そんなに珍しいか？」

「俺から見たら相当珍しいぜ。はじめて見たしな。興奮が・・・」

「と、とりあえず落ち着いてくれ。怖い」

「え？ああ・・・スマン」

言われた通り一気に静まった俺内心はすげえ興奮してる。皆は俺のことを「変態」だと思ってるかもしれないがマジで誤解だ。許せ。

「とりあえず飯は食つても大丈夫なんだよな？」

「大丈夫だ。問題は無いかと」

「そうか。んじゃ・・・いただきますつと」

腹へつてたら戦どころか何もやる気にならないからな。別に戦になんて行かないぜ？平和主義なんぞな。

「思つたんだが・・・元の体のとか何処に行ったか分かるのか？」

「体の最後ならちゃんと見届けたよ。今はもう灰になつてはるはず」

「はず？最後まで見届けたんじゃないのか？」

「見届けたんだがいまいち記憶に残ってないんだ」

さっきまでは俺が興奮して恐がっていたが今はどこか悲しい顔を

本気で考えてる！メモに何か書こうとしては止める動作を何回も行ってる！そんなに呼び名に困るのか！そんなことをが何回か行われてやっと文字が出てきた。

「保留」

「そ・・・そうか何か思い浮かんだら書いてくれ、ちょっと散歩に言ってくる」

「気を付けて」

4 (後書き)

4月1日だからって嘘は付かんぞ

4月になりました。早いですね。

1年の3分の1が終わりました。

こんな変化の無い人生を後何回繰り返せばいいのか

自分の気持ちの中に変えたいという意味が最近ぐんぐんと大きくな
ってきました。

ですが行動に出来ないのが自分です。

この小説を書くというのも

もしかしたら自分の中ではそれなりにでかい一歩なのかもしれませ
ん。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8395q/>

日常（偽）

2011年4月1日15時40分発行